

# 学術情報センター ニュース

## 第13号目次

- 英国の大学図書館による NACSIS -  
CAT の試用 .....2
- 《研究開発》
- 英国における日本語コレクション .....3
- 日本における国際書誌調整第5回  
公開講演会 .....6
- 密結合型図書館ネットワークにおける  
統合業務システムの研究（研究の  
概要） .....7
- 国際シンポジウム出席報告 .....13
- 《刊行物》
- 学術情報センター紀要 第3号 .....14
- NACSIS 利用の手引 .....14
- 《NACSIS サービス案内》
- 接続ニュース .....15
- 学術情報ネットワークの拡充整備と  
これに伴う運用停止について .....16
- 「海外研究プロジェクトデータベース」  
の使い方について .....18
- 「アメリカンセンター図書館総合目録  
データベース」のサービス開始に  
ついて .....19
- 電話回線からのアクセスポイントを  
身近（全国7か所）に設置 .....20
- NACSIS-IR システムデータベース  
収納状況 .....24
- NACSIS-CAT システムデータベース  
収納状況 .....25
- 《教育と研修》
- 平成2年度学術情報センター・シン  
ポジウムの開催について .....26
- 《その他》
- 学術情報センター日誌 .....27
- 学術情報センター「データベース  
'90TOKYO」に出展 .....28
- 人事異動 .....28

## 英国の大学図書館による NACSIS - CAT の試用

学術情報センター企画調整官

おおのきみお  
大野公男

英国図書館・研究開発部長 Perry 博士および Howley 女史が、6月14日に学術情報センターを訪問され、英国図書館およびケンブリッジ大学を含む二、三の英国大学図書館において、NACSIS - CAT を試用して目録を作成するパイロット・プロジェクトにつき打合せ・懇談を行った。センター側は猪瀬所長以下関係者が出席した。

このパイロット・プロジェクトが生れるきっかけは、1989年10月ベルリンで開かれた第2回日本情報国際会議で行なわれた目録所在情報サービス NACSIS - CAT のオンライン・デモンストレーションである。この会議に参加していたケンブリッジ大学図書館の小山騰氏が、このデモンストレーションを見られて、英国ひいてはヨーロッパの日本語図書目録作成に利用したらよいと考えられた。そして、上記国際会議に引き続いてベルリンで開かれた日本資料専門家欧州協会 (EAJRS: European Association of Japanese Resource Specialists) の設立集会で、その旨の提案が小山氏から行なわれた。

その後小山氏を中心とする EAJRS 有志と本センターの間で種々協議が続けられてきたが、1990年1月に英国図書館と本センターが国際回線で接続され、本センターの情報検索サービスの提供が開始されたこともあり、まず英国図書館及び二、三の英国大学図書館が参加して、NACSIS - CAT を使って目録作業を行なうテストをすることおよび英国側の取りまとめは英国図書館が当たることが合意された。Perry 博士は英国図書館の国際協力の担当者でもあるので、6月14日の打合せは極めて有用であった。

このプロジェクトの実施期間は約1年間で、本年10月頃開始することを予定している。終了した時点で、英国側と日本側が合意するチェックポイントの評価を含む報告書を英国側が作成し、それを資料として、英国側、EAJRS、および本センターが次の段階について協議することになっている。

この NACSIS - CAT 利用による外国が所有する日本語図書目録作成は、あくまでもテスト的なものであるが、本センターの展開してきた事業が国際的にも注目されてきた一つの現われと理解されよう。文部省初めシステムの開発やデータ入力などに協力していただいていた方々と共にこの喜びを分かち合いたいと思う。



## 英国における日本語コレクション

ケンブリッジ大学図書館

こやま のぼる  
小 山 騰

### 概観

英国における日本語コレクションは、戦後になって本格的に発展いたしました。戦前にも、英国図書館（旧大英博物館図書館）やケンブリッジ大学図書館などには日本語の貴重な古書のコレクションが納入されていましたが、英国における組織的な日本語資料の収集は戦後になって始まりました。通常、英国の大学におけるアジア・アフリカ等の地域研究・言語教育およびそれらのための図書館の発展は、間隔をおいて出されるレポート（報告）によって区分けされます。それらの報告は、それぞれの委員長の名称を冠して、Scarborough 報告（1947）、Hayter 報告（1961）、Parker 報告（1988）と呼ばれています。日本語コレクションの発展も同様にこれらの報告により歴史的に区切られます。Scarborough 報告により本格的に収集を開始した大学図書館は、SOAS（School of Oriental and African Studies ロンドン大学）、ケンブリッジ、オックスフォードです。シェフィールドは Hayter 報告により収集を開始いたします。Parker 報告等を契機にして、スターリング、ニュー・カッスル、ウエールズ、エセックス、リーズ、エジンバラ等も日本語資料を集め始めました。私たちは、SOAS（ロンドン大学）、ケンブリッジ、オックスフォード（ボードリアン図書館）、シェフィールドそしてそれに加えて英国図書館東洋部（Oriental Collections）を英国における実質的な日本語コレクションと呼んでいます。この五つの中では、シェフィールドは他の四つに比べると、その規模ははるかに小さくなります。また、Parker 報告以降の新しい日本語コレクションは、通常“New Centres”と呼び、前者の五つとは区別しております。



### 図書館関係団体

英国には、SCONUL（Standing Conference of National and University Libraries）という国立図書館と大学図書館を統合する組織があり、その中に ACOOM（Advisory Committee on Oriental Materials）という、東洋関係の資料を取り扱う委員会があり、地域や言語による図書館のグループ（Japan Library Group, China Library Group, South Asia Library Group, Middle East Libraries' Committee 等）により構成されています。Japan Library Group（JLG）の構成人員は、前述の5大コレクションおよびその他の日本研究資料を持つ機関の図書館員・図書館関係者と、図書館に興味を持つ大学教師等となっています。また、イギリス国内には、日本研究の学会として、BAJS（British Association for Japanese Studies）があり、年一回大会を「イースター」前後に開いています。前述の Japan Library Group（JLG）は年2回（春と秋）会議を開いていますが、そのうちの春の

会議は、BAJSの年会の一部として開かれます。実質、JLGはBAJSの図書館部門として位置付けられています。英国は、アメリカなどの状況とは少し異なり、アジア研究および東アジア研究に関する学会の組織は、国別・地域別に個々に編成されています。中国研究にはBACS (British Association of Chinese Studies) があり、韓国・北朝鮮には、BAKS (British Association of Korean Studies) があります。China Library Group や Korea Library Group は、それらの図書館部門として取り扱われています。この状況は、そのままヨーロッパの状況にも当てはまります。ヨーロッパ全体の日本研究の学会として、EAJS (European Association for Japanese Studies) があり、その中国版 (EACS) や Korean 版 (EAKS) もあります。ヨーロッパにおける JLG に相当するのが EAJRS (European Association of Japanese Resource Specialists) であり、ヨーロッパにおける China Library Group に当たるものが、EASL (European Association of Sinological Librarians) です。EAJS (ヨーロッパ日本研究学会) は3年に一度大会を開きますが、EAJRS は毎年会議を開催する予定になっております。EAJRS は、EAJS のある種の支部組織に相当するので、EAJS の大会が開かれる年 (たとえば1991年) には、EAJRS の年会は EAJS の大会に合併して開かれます。

### コレクションの配置

一口に英国の大学における日本語文献といっても、その置かれている状況は、個々の大学によって異なります。まず、複雑なケースとして、オックスフォード大学とケンブリッジ大学の場合を説明いたします。オックスフォード大学やケンブリッジ大学には、一つの大学の中に、大学図書館、学部・研究所の図書館、カレッジの図書館等、大小取り混ぜて、それぞれ百以上の図書館があります。この中で、研究のための図書館 (research library) として位置付けられるのは大学図書館です。オックスフォードのボードリアン図書館とケンブリッジ大学図書館 (U. L.) がそれに当たります。原則として、研究のための日本語文献はここに集中されています。ケンブリッジ大学図書館は、約7万冊 (アストン、アーネスト・サトウ、シーボルト等の古書のコレクションを含む) の図書と、約350タイトルほどのカレントな日本語雑誌を所蔵しております。ボードリアンには、約3万5千冊の図書と、約350タイトルほどのカレントな雑誌があります。両大学とも、実際に日本語教育が行われているところは東洋学部であり、両東洋学部に図書館があり、日本語文献を持っています。オックスフォードでは、Oriental Institute Library が東洋学部の図書館に当たり、約4千冊の日本語書籍を所蔵し、11タイトルの日本語雑誌を講読しています。ケンブリッジの東洋学部図書館は約1,600冊ほどの日本語図書を所蔵しています。オックスフォードは、現代日本研究のために Nissan Institute があり、その図書館も約3千冊の日本語書籍を所蔵し、9タイトルの日本語雑誌を講読しています。また、両大学には由緒ある大きな博物館 (オックスフォードのアッシュモリアンとケンブリッジのフィッツウィリアム) があり、それらの図書館も少数ですが日本美術関係を中心として日本語文献を持っています。科学技術関係の分野では、ボードリアン図書館内の Radcliffe Library やケンブリッジ大学図書館内の Scientific Periodicals Library でも少数の日本語雑誌を講読しています。

ロンドン大学は、ロンドンにある大学の集合体です。SOASはそのロンドン大学の一部

ですが、日本風にいえばそれのみで一つの大学に相当します。その SOAS の図書館にある日本語文献は、書籍が約 7 万 5 千冊、カレントな講読雑誌数が約 350 タイトルにのぼります。利用のしやすさや規模の大きさから言って、SOAS の日本語コレクションは、ケンブリッジ大学図書館と共に、英国における日本語コレクションの双へきだと思われます。5 大コレクションからシェフィールドを除いた 4 大コレクション（ボードリン、B. L.、SOAS そしてケンブリッジ）の中では、SOAS とケンブリッジが開架式で館外貸出を行なうのに対して、ボードリアンと B. L. は閉架式であり、館外貸出を行ないません。Heyter 報告により創設されたシェフィールド大学の日本語文献（日本研究センター図書館）は、社会科学関係を中心とした近・現代日本研究に焦点が置かれています。その蔵書規模は、書籍が約 2 万 5 千冊以上、カレントな日本語雑誌が約 100 タイトル以上となっています。

オックスフォードやケンブリッジの場合、日本関係の文献は、大学図書館（研究）、学部図書館（教育）という大まかな区分けがありますが、シェフィールドや SOAS の図書館の場合、一つの図書館で両方の機能を兼ねています。また、日本研究のための英語文献も、SOAS やシェフィールドでは日本語文献と並行して配架されていますが（すなわち、ある意味で言語よりも地域という主題が優先される）ケンブリッジ大学図書館、ボードリアン図書館そして B. L. では、日本語という言語による区分が優先するので、英語文献は日本語文献とは無関係に配架されている。

## 学術情報センターと海外における 日本情報関係の学協会との対応

センターは NSF（米国）、BL（英国）とのネットワーク国際接続を展開してきたが、同時に科学研究費国際学術研究ほかのプログラムを通じて、欧米、東アジアなど海外における日本情報に対する関心や需要を調査している。とりわけ、英国はじめ欧州への訪問調査には力を注いでおり、本誌でもおりにふれて報告してきた。

特に、本号で関連記事の多い日本情報国際会議や日本資料専門家会議との関連では、次のような参加状況である。

- 1987 年 9 月 1-4 日 第一回日本情報国際会議（英国ウォリック）
- 1988 年 9 月 14-16 日 英国図書館主催日本研究資源に関するコロキウム
- 1989 年 10 月 23-25 日 第二回日本情報国際会議（西独ベルリン）
- 1989 年 10 月 26 日 欧州日本資料専門家会議（西独ベルリン）
- 1990 年 9 月 5-8 日 第二回欧州日本資料専門家会議（ハンガリー・ブダペスト）

第三回日本情報国際会議は 1991 年 5 月 15-18 日にフランスのナンシーにある INIST で開催される予定である。

欧州各国とのバイラテラルな情報交換についても、日独情報パネルへの参加を初めとして、機会をとらえて出席し状況把握に努めている。

なお、北米における日本情報に関する蓄積の豊富さはよく知られており、わが国大学図書館は「日米大学図書館会議」の開催を通じて、その状況を把握してきた。これには、センターも機会を与えられて出席している。

## 日本における国際書誌調整第5回公開演説会

学術情報センターが日本における国際書誌調整の現状分析と、東アジア文字データベースの国際交換に関する1990年代における展望を求めて、学術情報センター共同研究と国際共同研究（科研費国際学術研究）の二方面から、いずれも山田尚勇研究開発部長を代表者として検討をすすめていることは、すでに報じている（本誌第10号（1989・12））。



この関連で第5回公開講演会を1990年6月19日（火）の午後、約60名の参加を得て、学術情報センター別館会議室で開催したので概要を報告する。

センター所長猪瀬博の開会挨拶につづき“Development and Current Status of Libraries in Korea”と題して李鳳順（Ms. Lee Pongsoon）韓国社会科学図書館館長が、韓国における図書館の発展と現状について報告した。李先生は梨花女史大学の図書館長、図書館学科主任教授を歴任されたのみならず、各種の国際会議に韓国を代表して出席された経験も多く、さまざまな機会にお世話になった日本からの研究者、図書館人の多いことでも知られている。金沢工業大学の招へいにより来日された機会に講演をお願いしたもので、韓国図書館事情が簡潔にまとめられ、よい概観を得られる講演であった。

田辺広富士大学教授は「日韓図書目録・排列上の特質」と題して、わが国大学図書館におけるアジア資料全般の問題点について韓国資料を題材として論じた。資料および目録レコードを言語別に別置・別排することについて、多くの経験を踏まえた示唆に富む講演であった。

現在、標記研究では、多数の研究協力者の参加を得て、KCR および KOR-MARC の入力マニュアルの翻訳調査をすすめている。これによって英米資料に対する AACR と同様に韓国・朝鮮語資料に対する規則の理解をすすめようとするものである。「KCR（韓国目録規則）翻訳作業中間報告」は、研究協力者を代表して鈴木裕子（アジア経済研究所資料部）、林昌夫（都立衛生研究所図書室）、鎌田陽子（一橋大学附属図書館）の3名によって行なわれた。韓国語からの翻訳そのものの問題、わが国における AACR 翻訳版や NCR などとの用語や概念の同索性、書誌記述における特殊韓国的事情とそれらに相当する特殊日本の事情との突合せなど、多岐にわたる問題と苦衷に満ちた対応策をはらんだ中間報告で、当事者ならではの苦心をふまえたものであった。

研究代表者であるセンター研究開発部長山田尚勇が、参加者、発表者に謝意を表すとともに、この種の調査研究の地道な努力を要するに比して成果が広く理解されにくいこと、しかしセンターとしては多くの賛同を得ていることを謝し、なおいっそうの支援を要請し、邁進する決意をのべて閉会挨拶とした（文責：内藤衛亮）。

# 密結合型図書館ネットワークにおける 統合業務システムの研究——研究の概要——

学術情報センター

ね ぎし まさ みつ  
根 岸 正 光

標記の科学研究費補助金による研究が完了し、報告書がまとめられたので、概要部分を抜粋して掲載する。

## 1. 研究の背景とこれまでの研究経過

### (1) 学術情報システムの環境分析と構築プロセスの研究

文部省科学研究費補助金による総合研究「密結合型図書館ネットワークにおける統合業務システムの研究」(昭和 63・平成元年度)は、学術情報センターにおける「目録所在情報サービス」と称するオンライン共同分担目録システムの開発、運用、発展等に関わる一連の研究のひとつとして位置づけられる。すなわち、昭和 59・60 年度における総合研究「学術情報システムの環境分析と構築プロセスの研究」において、アンケート調査や訪問調査を通じて大学図書館等におけるオンライン目録システムの期待・要望を集約し、整理・分析することを試みた。<sup>1)</sup>これは、ちょうど前記の目録システムが稼働し始めた時期に相当している。この調査研究の過程で得られた知見のひとつに「密結合型図書館システム」に対する図書館側の強い需要があった。すなわち当時の東京大学文献情報センターでは、センター側目録システムの開発に併合して、まず中・大型電算機を前提にする図書館側対応システムの実現を図り、これに引き続いて、事務用小型電算機やワークステーションを対象にする簡易接続方式である VTSS を実現させた。こうして目録所在情報サービスの利用館が増加する中で、このサービスを、個々の図書館における機械化システムと有機的に結合して運用できるような仕組み、すなわち密結合型図書館システムの有用性が、明確に認識されてきたのである。

### (2) 学術情報ネットワークにおける密結合型図書館システムの諸機能の高度化とその応用

そこで、昭和 61・62 年度において、密結合型図書館システムを中心テーマとして、「学術情報ネットワークにおける密結合型図書館システムの諸機能の高度化とその応用」と題する総合研究が組織された。この研究は、「密結合型図書館システム」について、これに必要なハードウェア、ソフトウェア、あるいはこれを前提にした図書館業務の運行方式、またこのシステムの応用可能性等の諸側面にわたって、プロトタイプの開発を中心にして研究を展開するものであった。これは、全国システムの運用者である学術情報センター所属の研究者と、その接続利用者側としての図書館情報大学、国文学研究資料館、慶應義塾大学の図書館システム研究者による総合研究であって、この研究組織は基本的に今回の研究にそのまま引き継がれている。そこで以下では、まずこの研究内容を、報告書に即して一

とおりとまとめておく。<sup>2)</sup>

この研究は、研究分担者の各機関に、研究に必要な機器類、通信回線などを配置し、実際に学術情報センターの目録システムを接続利用しながら、実験的な密結合型システムを開発し、試用するなどして、具体的、実証的結論を導くことを目標に進められた。この研究は、(1)中・大型計算機向きのN-1接続方式での密結合的利用方式、(2)上位パソコン、ワークステーションなどによるVTSS方式における密結合型利用と、(3)このような密結合化に向けて、現行の目録システムの利用状況と問題点を分析するという3方向から展開された。その概略は次のようなものであった。

すなわち、「1. メインフレーム接続における密結合化」として、N-1接続の中型の電算機を図書館に設置して、学術情報センターの目録システムを利用する方式での密結合化について、図書館情報大学に設置された従来型の目録端末によって目録システムを試用しつつ、現行の目録システムを密結合的に利用しようとする場合に生ずる問題の整理と解決の方向を示した後(松井)、同大学の図書館システムLIAISONを、学術情報センターの目録システムとの密結合的連動方式に拡張するということを主たる研究対象事例として、密結合の機能要件や実現方法を検討した(石塚)。

次に、「2. ワークステーション接続における密結合化」として、VTSS方式によって接続されるワークステーションを目録端末として用い、これに密結合的諸機能を開発・付加するという方法での研究が図書館情報大学、慶應大学文学部図書館情報学科、国文学研究資料館において行われた。これについて学術情報センターでは、目録端末用VTSS基本ソフトウェアの開発と、各分担機関設置のワークステーションへの移植に関する研究開発(大山)、マルチウィンドウ方式によって、目録システムの画面展開を保存・追跡し、目録作業の進行を状況に応じて柔軟に制御できるようなシステムの研究(安達、橋爪、大山)研究が行われた。また、多言語処理を念頭にして開発が進められているTRONの、目録端末用ワークステーションへの応用に関する検討(宮澤)も行われた。

図書館情報大学では、密結合システムにおける自動アップロード機能の研究(山本、長谷部)が行われた。また、慶應大学三田情報センターの図書館・情報学資料室の蔵書を対象として、小規模図書館室における遡及変換を、密結合型ワークステーションを用いて効率的に実施する方式が検討された(細野、上田他)。国文学研究資料館では、いわゆるOPACの場合に要求される高度な検索機能について検討を行って、利用者の指示するキーワードの意味をシステム側で学習しつつ、有効な検索を実現する方式が提案された(安永、堀、戸田)。

学術情報センターの目録システムは、一般に「書誌ユーティリティ」と称されるものであり、「3. 書誌ユーティリティの構成」として、その動向をまとめた。まず、書誌ユーティリティの機能を整理しつつ、稼働後3年間を経過した学術情報センターの目録システムの状況を照らして、密結合型利用への志向の背景を明らかにし(根岸)、つぎに、総合目録について、その意義、機能等を再吟味して、書誌ユーティリティやMARCと総合目録の関係の明確化を試みた(内藤)。また、書誌ユーティリティの機能向上の一例として、分類付与の自動化方式の検討(石川)がなされた。

上にみるとおり、昭和61・62年度での研究では、学術情報センター・システムと個別図書館システムとの間の結合の密接化という視点を中心として、各般に互る研究が展開され



たわけである。

## 2. 密結合型図書館ネットワークにおける統合業務システムの研究の概要

本報告書に係る総合研究「密結合型図書館ネットワークにおける統合業務システムの研究」は、最近におけるネットワーク分散型のシステム構成技術の進展を踏まえて、「密結合型統合図書館業務システム」のあり方を、技術と制度・実務の面から検討することによって、学術情報システムにおける大学図書館向けサービスの今後の展開の方向を示そうとするものである。

前項にまとめたように、本研究に先立つ「学術情報ネットワークにおける密結合型図書館システムの諸機能の高度化とその応用」と題する研究は、学術情報センターに形成される全国大学図書館総合目録データベースを、その原データ供給者である個々の大学図書館での目録データベースの構築といかに効率的、有機的に連動させるかという点を主たる関心事として展開された。一方その研究期間であった昭和61・62年度は、わが国大学において、いわゆるLANの設置が急速に進む時期に当たっていた。学内LANでは、当然ながら図書館へのアクセスもそこに統合されることになる。従って、密結合型図書館システムにも、多くはそうしたネットワーク上で有効に機能するものであることが期待されることになる。こうした新たな姿勢の展開を踏まえて、先の研究を展開させたものが本研究である。

研究の成果は、密結合統合型図書館システムに直接関わる部分（Ⅰ. 密結合統合型図書館システム）と、そこからさらに将来展望に踏み込んだ議論（Ⅱ. 目録システムの展開）とに大別して、本報告書にまとめた。前者として、まず(1)アンケート調査に基いて、大学図書館における目録機械化の動向分析を行う一方、(2)密結合統合型図書館システムのプロトタイプを開発し、また(3)この種システムの実現化への要素技術である自動検索機能の開発・実験を行った。次にシステムの構成方式を、(4)メインフレームによる集中処理方式の場合と、(5)LAN分散処理方式による場合とに分けてそれぞれ検討を加え、双方の利害得失、実現上の諸問題を論じた。

目録システムの今後を展望するため、まず(6)図書館システムの海外動向を見渡して整理し、わが国の状況との対比から将来への示唆を得るものとした。同じく、(7)昨今海外で特に普及しつつあるハイパーテキストについて、目録データベースへの応用の可能性を検討した。「密結合」とは、究極的には利用者と図書館との間に実現されるべきものである。この観点からは、当面、文献複写業務の新しい方式の模索が必要であるので、(8)文献複写の現状における問題点を根底的に考え直した上で、(9)新技術を導入した文献複写システムについて構想した。次に(10)図書館資料自体が電子化される「電子図書館」を対象とし、そこでの目録システムとはいかなる形態、機能のものになるのか、まったく新たな視点から検討を行った。

以下、本報告書の構成に従って、各論稿の要点を相互間の関連を含めてのべる。

上田修一「2. 大学図書館における目録機械化の動向——アンケート調査結果とその分析」は、コンピュータを導入している大学図書館を対象として実施した、図書館機械化の動向とネットワークへの関わりに関するアンケート調査の結果分析報告である。ここでは、前記の「学術情報システムの環境分析と構築プロセスの研究」において、1984年に実

施された図書館機械化に関わる調査との対比も論じられている。前回調査でのコンピュータ導入館数 131 は、今回調査では 269 館に増加している。このうちパソコンのみの利用としたものは 29% 程であり、他は図書館専用あるいは計算機センターの小型～大型電算機を利用している。学内 LAN との関係では、この調査で既に 51 大学において LAN が整備されているとの回答を得ている。もっとも、LAN と接続していない図書館も多く、接続済 36 館対未接続 29 館という状況にある。設問への回答の様子からみて、図書館における LAN に対する知識が、未だ不十分であることがうかがわれる。図書館サービスに対する LAN の役割の重要性に鑑み、今後の積極的対応を喚起して行く必要が指摘される。その他、OPAC、遡及変換など機械化における今後の課題事項への取り組み方の分析が行われた。

高須淳宏「3. VTSS による密結合型利用者インターフェイスの試作」は、ワークステーション上のマルチウィンドウという、今後一層の普及が見込まれる処理環境を用いて、VTSS の端末機能を含む複合機能端末を試作し、実験を行ったものである。マルチウィンドウ環境は、1 台のワークステーションで複数の業務が同時に処理できる上に、その業務間でのデータの複写操作などを画面上で簡単に行い得る点で、密結合的図書館システムの実現に好適な環境である。ここでは、目録システム画面の保存と参照用画面の表示機能、目録システムとローカル・システム（図書館側固有の処理プログラム）との間でのデータの複写操作機能を付加したプロトタイプが開発された。マウスとコマンド・メニューによる位置／処理指示により操作は極めて直截・簡明になり、学術情報センターの目録システムとの対話と図書館側システムに対する操作とを、混乱なく処理できることがわかる。これは、密結合型目録端末のかたちを具体的に示すものとなっており、さらにウィンドウの管理支援機能といった、今後望まれるより高度な機能への展望が示される。

山本毅雄「4. 密結合型図書館システムにおける自動検索機能の開発・実験」は、学術情報センターに形成される全国総合目録データベースと図書館個別のローカル・データベースとの間の不整合を自動的に摘出して、補修するためのシステムの実験である。具体的には、図書館情報大学の LIAISON システムの和図書目録データベースと学術情報センターの和図書総合目録を、同時にワークステーション上に呼び出して双方を照合する。その際、現在目録担当者が対話的に行っている、書誌構造の相違の読み替え照合、ヒット件数による検索戦略の調整といった、対応方法を「知識」としてワークステーションに内蔵させて、あたかも一定の知識をもった担当者と同様の対処をしながら、「有意な」不適合部分を検出してゆく。この実験システムでは、知識ベースがまだ限定されているが、レコードの検索、内容データの照合、登録という一連の目録作業過程が、相当程度自動的に実行できる。従って、密結合型システムの構成方式として、これは現実性があり、今後こうした方向での研究開発が有望であることが示される。

山本毅雄・石塚英弘「5. 密結合統合型図書館システムの構成法——集中処理方式の可能性と将来」は、図書館情報大学の LIAISON システムの設計と利用の経験を踏まえて、密結合・統合型・集中処理方式での図書館システムの要件・機能について考察したものである。ここで「集中処理方式」とは、中大型汎用機を図書館に設置し、その端末を各所に配置して、各種の図書館業務を集中的に処理するという、いわば従来方式の機械化システムである。本稿では、学術情報センター・システムについて、目録作業以前でのセンター・データベースの利用方式と、センター・データベースでのデータ更新のローカル・データ

ベースへの反映方法が、密結合化に向けての大きな検討点であることを指摘する。一方、図書館側システムでは、データの早期取り込みとその「育成」(継続的な修正と利用)、作業順序の柔軟化、バッチ処理業務への適正な評価、センター・データベースとローカル・データベース間での整合性維持、利用者向きの諸機能といった各点に互って考察している。ネットワーク上のワークステーションでの分散処理という構成方式は、今後その適用が各方面に広がるとしても、集中処理に適した業務分野は依然としてある。そして、メインフレームの LAN 接続やワークステーションの大型化によって、構成方式の区分が不明確になるという状況を指摘しつつ、上記のような要件自体には変化が生じないことを結論する。

大山敬三「6. 密結合統合型図書館システムの構成法——LANによる分散処理方式の動向と将来性」は、前稿と対照されるべきものである。すなわち、ここではLANによる分散処理を前提として、密結合型の図書館システムを構想することを試みている。まず、LANというものの種別、機能、構成要素をひとつひとつ整理する。この後、図書館システムを、各業務に必要なデータベースの構成という観点から整理して考察する。目録業務だけを考えても、学術情報センターの目録データベースと個別図書館のローカル・データベースの双方を扱う必要がある点で、これは本来的に分散処理にならざるを得ない。従って、ここにLAN(図書館内LAN)を導入することは、むしろ自然であり、コスト、拡張性の面でも有利である。次に、図書館システムと学内LANとの結合についても考察し、全体としては、学内基幹LANと図書館内LANという階層型ネットワークが、密結合統合型図書館システムにとって好適であろうとの結論に至る。学内LANの構築に進みつつある現在、本稿は、これを前提にした図書館システムの新たな構成方式を示唆するものになっている。

以上は、学術情報センター・システムとの密結合を関心の中心に据えて、あり得べき図書館のシステムについて、実態調査、実験、技術動向評価などの手法によって論じたものであった。これらを踏まえた上で、さらに将来を見通して、今後の目録システムの展開について、次のような考察を行った。

松村多美子「7. 海外動向にみる今後の図書館システム」では、「紙なし図書館」から「壁なし図書館」へという世界的趨勢を論じている。つまり、いわゆる電子図書館は、当初は単的にペーパーレス・ライブラリーという視点で論じられてきたが、現在に至り、その本質はむしろ「壁なし図書館」の方にあるとみる。これは研究・教育の全面に互って情報技術を駆使した「エレクトロニック・キャンパス」の概念に基づく、大学図書館機能の再定義の結果である。コロンビア大学、カリフォルニア大学、エジンバラ大学、アストン大学等での事例をひきながら、CD-ROMの利用、OPAC、電子メールによる貸出申込、ファクシミリによる文献送達、計算機センターとの協力などについて考察し、今後の大学図書館の専門職が「情報カウンセラー」たるべきことを示す。

石塚英弘「8. 目録システムにおけるHypertextの可能性」は、前稿に論じられた情報技術のなかでも、データベース構成法のひとつとして注目されているHypertextを、図書館の目録システムに応用することを、実験をも通して考察したものである。Hypertextの発案は1945年にさかのぼるが、注目すべきは、それがあつた種の自動化図書館システムとして構想されたという点である。現状では、個々の図書館のデータベース化の方式として応用されているが、上記のような起源からみても、これは目録システムに十分適用可能であろう

と思われる。そこで、レコード、映画、児童図書という非文字情報の有意な資料について、実験的目録システムを作成した。現用の Hypertext ツールは、DBMS 的機能を欠くため、こうした機能部分を開発・付加する必要があったが、基本的情報構造の捉え方からみて、Hypertext の目録システムへの応用は有望であることが示された。

影浦峽・桂英史「9. 現状における ILL の問題点と将来展望」は、ILL について、図書館におけるリソース・シェアリングの発達過程と関連付けながら整理を試みた上で、現状サービスの問題点を摘出し、すすんで電子図書館時代での ILL の形態への展望と課題を論じたものである。すなわち、リソース・シェアリングと ILL の関係は、書誌ユーティリティによる共同目録の実現によってひとつの転機を持った。現在のわが大学図書館界はまさにこの段階といえる。つぎには当然、ILL システムが書誌ユーティリティ機能にとり込まれた段階がありうる。しかしこれも、電子図書館の出現が予見されるや、さらに決定的な再定義を迫られる。文字どおりの「図書館間」の貸出という従来のルートから、図書館から直接利用者へという新たなルートへの移行が生じるからである。この場合大きな問題は、技術的なものよりも、むしろ著作権処理という社会制度的な問題である。一様かつ迅速なサービスの提供という図書館の根本理念に則った図書館制度の再構成が模索されることになるであろう。

安達淳「10. 新技術による ILL システムの構想」は、前稿における ILL の歴史的また社会制度的検討と並行する形で、専ら技術的な可能性を追求して、ILL の新しい仕組みを構想してみようとする試みである。技術的にみて、当面の応用性が高いと目されるファクシミリと光ディスクについて、ILL への適用上の問題を整理し、とくにファクシミリ・ネットワークの構成方式について検討している。これは電子図書館のための文献配信網としても有望なものと考えられる。ともあれ、学術情報センターにおける ILL システムの実用が日程にのぼっている現時点において、様々の可能性を追求する中から、妥当なシステム・イメージを析出させてゆく必要がある。

宮澤彰・石川徹也「11. 『電子図書館』における目録システム」は、現在考えられる図書館の究極的姿のひとつといえる「電子図書館」に関心を集中させて、そこでの目録システムというものは一体どの様な形態のものとして存在し得るかという、根源的問題を考察したものである。結論的には、図書館資料全体が電子化された状態でも、資料本体の表象的属性を抽出、凝縮させた情報源として、目録の存在は必須であろう。ただし、電子化資料に対する目録の作成には、従来とはおよそ異なった工程が可能であり、またそれが効率的にもなるであろう。こうした認識に立って、そこでの目録作成の工程に要求されるとみられる諸機能について、現在利用可能なシステムと対比しつつ考察を展開し、開発が望まれるシステム機能を明らかにしている。

#### <参考>

1) 猪瀬, 井上, 上田, 根岸, 三輪編著「学術情報システムと大学図書館」紀伊國屋書店, ISBN 4-87573-122-1, 209p, 1988.

2) 「学術情報ネットワークにおける密結合型図書館システムの諸機能の高度化とその応用——昭和62年度科学研究費補助金研究成果報告書」研究代表者 猪瀬 博 (学術情報センター), 昭和63年3月, 158p.

国際シンポジウム出席報告 学術情報センター助教授 安達 淳<sup>あ だ ち しゅん</sup>

「科学技術産業情報サービスの将来に関する国際シンポジウム (International Symposium on the Future of Scientific, Technological and Industrial Information Services)」が5月28日から4日にわたってソ連のレニングラードで開催された。これは、国際原子力機関 (IAEA) が主催するもので、IAEA が編集してサービスしているデータベース INIS (International Nuclear Information System) の事業 20 周年を記念して開催されたものである。さらに国連関係の FAO, UNESCO, UNIDO の 3 機関も協賛し、これら国際機関とつながりを持つ情報サービス関係者が主に集うことになったようで、76 カ国から総勢 289 人が集まった。わが国からの参加者は 4 名であった。開発途上国からの参加者も多く、国際色豊かな会議であった。また発表には英、仏、露、西の同時通訳が施された。

会議は単一セッションの形態で、1) 「利用者の情報ニーズ」(1日)、2) 「情報検索および流通システム」(1日半)、3) 「情報管理と戦略」(1日) のそれぞれの表題のもとで招待講演と一般の発表があり、最後のパネルをあわせて4日に渡り行われた。1) ではカナダの Woolston は「今後情報から知識へとニーズが変質していき、value-added information の必要性が高まる」と述べ、また米国の Lancaster は研究者らの情報ニーズの分析に基づき information professional に求められる資質について議論していた。米国の Bearman は「これからは Individual-oriented Information Service の時代」と主張していた。2) では結局のところ、新しい情報メディアである CD-ROM, AI (人工知能) というキーワードが飛び交い、それにより開かれる新たな可能性を探るという発表が多かったが、その中で一人英国の Spark Jones は「AI が今できることは簡単なことで現実には余り意味がなく、一方今できないことは当分本当に出来そうもない、Don't overestimate AI.」と述べ、小気味よいチュートリアルであった。また、このセッションの中で仲本秀志郎氏により我国の JICST の SIST に関する発表があった。3) では、各国の現状や計画についての発表が主体であり、フランスからは CNRS, 米国からは NTIS の活動の包括的な解説、英国図書館からは ADONIS プロジェクトの総括の報告があった他、開発途上国の現状についても報告された。我国の学術情報システムについては、筆者がデータベース、図書館、ネットワーク、今後の展望等について講演した。

先進諸国を始め各国の情報サービスの状況が網羅できた点で大変有益であった。例えばアラビア語の文字処理などめったに聞くことのできないような話題もあった。他国からの参加者の意見を聞いても、シンポジウム全体については発表内容が広範に渡るため、議論の焦点がぼやけ、やや散漫な印象であったことは否めない。一方、情報に関する南北問題については、余り深刻に考える必要はないと判断した。というのは、開発途上国において、情報サービスのための人材や経費の確保は依然として重要な問題ではあるものの、情報そのものは比較的入手しやすく、さらに IBM のパーソナルコンピュータや CD-ROM の利用において先進国のレベルを確保するのは極めて容易であるからである。開発途上国からは、教育訓練の問題や新しい動向を把握することに主要な関心があるようで、またデータベースの中でも農業関係に関心が強いようであった。また、規模は小さいものわが国の学術情報システムと同様な情報システムの計画がインドなどのいくつかの開発途上国でみられた。会議録は電子出版により近々 IAEA より発行されることになっている。

## 「学術情報センター紀要」第3号の刊行について

「学術情報センター紀要」第3号が9月末に刊行されます。掲載論文は以下のとおりです。なお、この紀要は各大学図書館等に送付いたしますのでご利用下さい。

韓国の文字コードについて	学術情報センター教授	宮澤 彰
韓国標準規格と日本工業規格の漢字について	韓国公州大学助教授	李 春 澤
文献の論理構造を考慮した全文検索システム ドキュメント・デリバリーのための	学術情報センター助手	影浦 峽 他
電子図書館	学術情報センター助手	桂 英史 他
知識ベースシステムにおけるタスクの役割	学術情報センター助教授	小山 照夫
機械概念設計プロセスのモデリング	学術情報センター助教授	小山 照夫
大規模関係データベースのための 並列処理マシンの一構成法	学術情報センター教授	濱田 喬 他
放送形トラヒックに対する 高速パケット通信網のルート制御	学術情報センター教授	浅野正一郎 他
日米の研究開発体制を考える	学術情報センター教授	山田 尚勇
テスト評価、均質的文化、独創性養成	学術情報センター教授	山田 尚勇

## NACSIS 利用の手引—近日発行

<情報検索サービス，電子メールシステム>

学術情報センターでは、情報検索サービス（NACSIS-IR）、電子メールシステム（NACSIS-MAIL）の利用の概要と申請手続き等をまとめた「NACSIS 利用の手引」を近日中に発行する予定で準備を進めています。

発行予定の「利用の手引」は当センターの「情報検索サービス利用の手引」昭和62年4月発行版及び「電子メールシステム利用の手引」平成元年4月発行版の内容を一冊にまとめ、各々のサービスの内容が簡潔に理解し利用できるように編集されています。

この「利用の手引」の内容は大別してⅠ部からⅣ部の構成で、Ⅰ部は「概要」として各サービス案内、利用案内、利用資格、利用料金、利用者マニュアルの案内、Ⅱ部は「申請」として申請手続きの方法、パスワードの管理、利用にあたっての留意事項、Ⅲ部は「システムの利用」として接続に必要な機器等、各サービスの接続手順と利用法、Ⅳ部は付録として学術情報センターの各サービス及びシステム利用に関する規則・実施細則、利用申請書、同記入要領等掲載されています。

この「利用の手引」の頒布先の対象としてはこれから学術情報センターの各サービスを利用する予定のある方を対象としますが、ご希望の方へも差し上げる予定です。

ご希望の方は下記のところまでハガキまたは電話で申込みください。なお、一人一部とさせていただきます。

☎112 文京区大塚3-29-1 学術情報センター管理部共同利用課共同利用係

☎03-942-6933, 03-944-7115

## 接続ニュース

前号以降、新たに目録所在情報サービスの参加機関となった図書館は、以下の通りです。  
(平成2年8月現在)

No.	機 関 名	接 続 日	No.	機 関 名	接 続 日
132	高 知 大 学	2. 7. 6	135	放 送 大 学	2. 8. 2
133	桃 山 学 院 大 学	2. 7. 12	136	東 京 水 産 大 学	2. 8. 15
134	玉 川 大 学	2. 7. 12	137	東 海 大 学	2. 8. 15

この結果、参加機関数は、国立大学 87、公立大学 3、私立大学 41、共同利用機関 5、その他 1、合計 137 となりました。(共同利用係)

## 利用料金の最低請求金額の変更について

当センターの利用料金の請求は、今までそれぞれのサービスの利用料金の合計が 200 円未満の場合は、200 円以上になった月にまとめて請求させていただいておりましたが、平成 2 年 10 月分より、200 円を 500 円に変更させていただきますのでご了承くださいようお願いいたします。

なお、年度末には、500 円未満の利用料金についても請求させていただきます。

利用料金についてのお問い合わせは管理部共同利用課共同利用係まで

☎03-942-6933・6934

## EXIRPTS 会議を東京で開催

第 8 回 EXIRPTS 会議すなわち「研究プロジェクトの国際交換に関する専門家会議」が 11 月 6 日から 9 日に学術情報センターを世話機関として科学技術情報センター (JICST) の協力を得て開催される。EXIRPTS (エクサープツ) は、Exchange of Information on Research Project の省略形で、会議の構成機関グループとその活動を表す。1982 年に始まった'先進' 8 ヶ国の政府関係研究助成機関等の長による会議の第 6 回 (1987 年 3 月) で「科学技術データの相互交換の推進」が合意され、具体的な検討のために EXIRPTS 会議が設置された。EXIRPTS の構成機関は 8 ヶ国の政府関係研究助成機関または政府助成研究に関するデータベース作成機関である (p. 18 参照)。1987 年 7 月の第 1 回 (カナダのオタワ市) から 1990 年 5 月の第 7 回 (西独ボン市) までの会議で、交換情報の範囲と形式、電子メールによる交換プロトコル、情報交換の開始時期 (1990 年 4 月)、EXIRPTS の構成と活動方針・内容などを決定した。交換情報は各機関のデータベースとして公開され、本センターでは「海外研究プロジェクトデータベース EXRP」としてサービスされている (センターニュース第 11 号および本号 p. 18 参照)。

## 学術情報ネットワークの拡充整備と これに伴う運用停止について

### 1. 学術情報ネットワークの拡充整備

「学術情報ネットワーク」は、学術情報センターが整備するノードを介して全国の大学等の計算機センター、図書館等を接続したデジタル・ネットワーク（パケット交換網）です。学術情報ネットワークへの接続コンピュータ数は、平成2年8月現在で229に達しており、研究者等に対して学術情報の基礎的流通網として、ますます学術研究に占めるウェイトが大きなものになってきています。

平成元年度までに、学術情報センターを中心とした22ノード機関相互間を接続する学術情報ネットワークが整備されました。

平成2年度は、さらに北見工業大学、電気通信大学、岡崎国立共同研究機構、鳥取大学、琉球大学の5機関にネットワーク通信機器（PMX、MUX等）を設置して、ネットワークの拡張を行い、平成2年12月28日から新構成で運用を開始します。これで、国内ノードは27機関になります（別図参照）。

### 2. 年末の運用停止

学術情報ネットワークの加入機関に対しましては、別途、直接連絡しますが、このような新規ノードの設置ならびに網構成の変更に伴い、下記期間中は学術情報ネットワークの運用を停止させていただきますので御了承いただきたくお願いいたします。

#### 学術情報ネットワーク運用停止期間

平成2年12月23日（日） 午前9時から  
平成2年12月28日（木） 午前9時まで

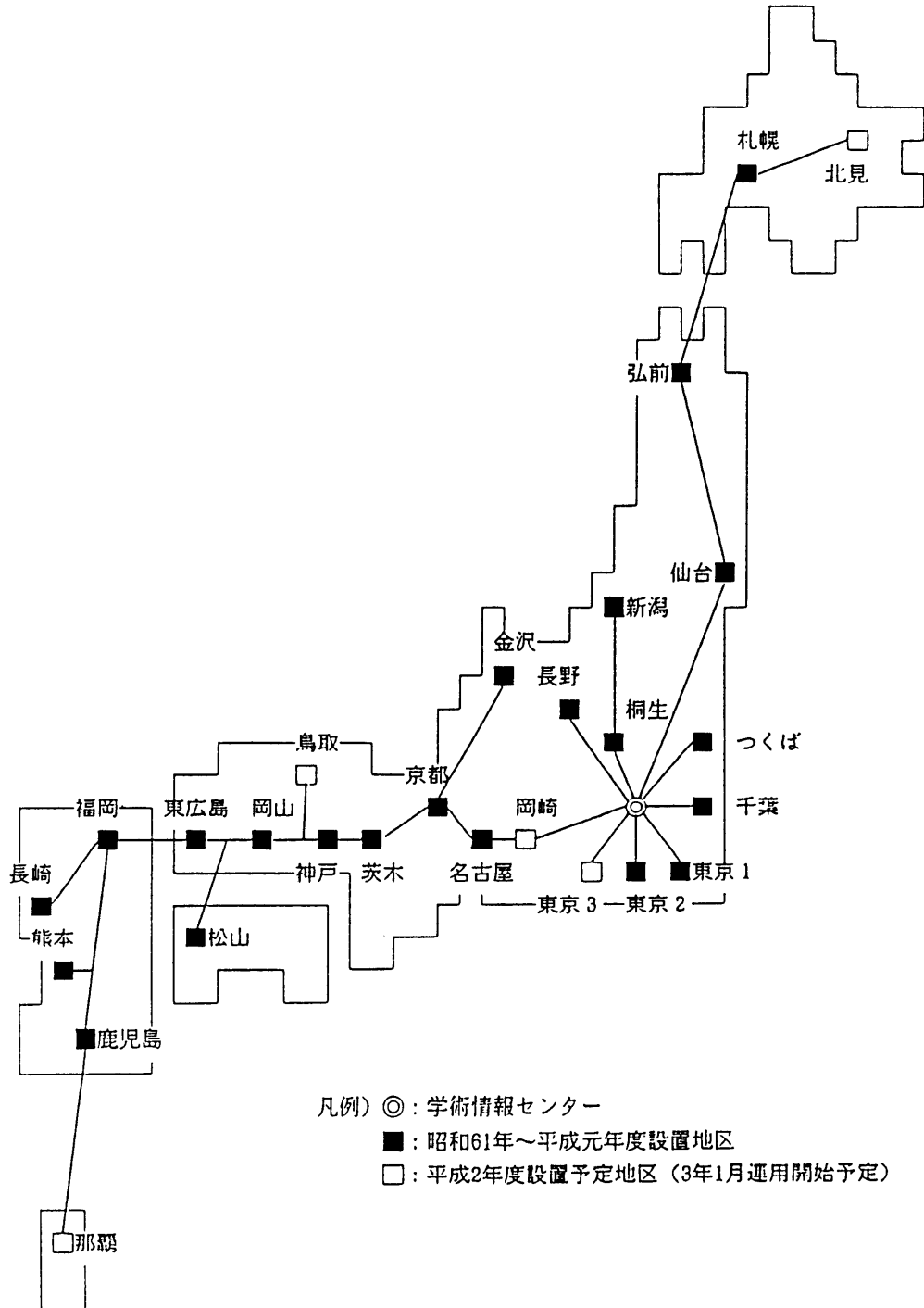
12月28日午前9時以後、年末年始を含め通常の運用をいたします。今後もネットワークの整備または保守のために、同様な措置をとらせていただくことがありますので、御了承いただきたくお願いいたします。

なお、学術情報センターの目録・所在情報サービス（NACSIS-CAT）、情報検索サービス（NACSIS-IR）及び電子メールシステムの利用については、学術情報ネットワークを介さずに利用することも可能です（例：DDXあるいは電話網によって）。また、個々の大学等の計算機センター等のサービスの利用については、当該センターにご照会ください。

（ネットワーク係）



<<学術情報ネットワーク概念図>>



## 「海外研究プロジェクトデータベース」の使い方について

### 1. はじめに

「海外研究プロジェクトデータベース」は、従来「研究プロジェクト情報データベース(仮称)」としてお知らせしていたもので、平成2年5月からサービスを開始しています。以下に使い方の一部を、簡単に説明します。

なお、データベースの内容等は、学術情報センターニュース第11号(1990. 3発行)でお知らせしましたが、さらに、詳しい内容及び利用方法等を知りたい方は、利用者マニュアル(試行版)をご覧ください(必要な方は共同利用係へ請求してください)。

### 2. データ交換に参加している国及び機関

日 本	学術情報センター*, 日本科学技術情報センター (JICST)
カナダ	National Research Council (国立研究協議会)
ドイツ	Deutsche Forschungsgemeinschaft (ドイツ研究協会)*
フランス	Centre National de la Recherche Scientifique (国立科学研究センター)
英国	Science and Engineering Research Council (科学工学研究協議会)*
イタリア	Consiglio Nazionale delle Ricerche (国立研究協議会)*
スウェーデン	Styrelsen for Teknisk Utveckling (国立技術開発委員会)
米 国	National Science Foundation (国立科学財団)*

当面は、データ提供のあった“\*”印の5機関のデータによるサービスとなります。その他の機関のデータについては、入手次第サービスします。サービスに当たっては、オンライン画面の『NACSIS-IR ニュース』でお知らせします。

### 3. データベースの使い方

検索や表示等の基本的コマンドの使用方法は、基本的には他のサービス中のデータベースと同様です。

#### (1) データベース呼出コマンド

EXRP [ 研究プロジェクト情報の国際交換 (Exchange of Information on Research Projects = EXIRPTS) の省略名称 ]

#### (2) SEARCH コマンド等で検索し、DISPLAY コマンドで表示する。

特徴ある検索として、例えば、研究期間は開始と終了が表示されていますが、索引は研究期間内のすべての年から作成しますので、進行中の年を指定しても、検索することができます。

例) SEARCH Y. 1988 で下記の表示例の研究プロジェクトも検索されます。

#### (3) LOOK コマンドで索引語を通覧してから検索する。

例) LOOK AFFN. \* で機関別研究プロジェクト件数がわかる(AFFNは機関名のプリフィックス)。

[ データベースの表示例 ]

```

Accession : 900501001
Ref Number : USA NSF OCE8608823
Rec Type : 1 (With Abstract)
Project : Germanium, Selenium, Arsenic, and Antimony in the Black Sea
Dates : Start : 19871115 End : 19900430
Sci Contact : Cutter, Gregory
Address : Old Dominion University Department of Oceanography Norfolk, VA
Zip Code : 23508-0369 Tel : +(804)-440-3000
Telex : Fax :
Keywords : Ocean Sciences : Chemical Oceanography
Abstract : This is an investigation of the cycling and speciation of germanium, arsenic, and antimony in the Black Sea, the world's

```

(データベース課)

## 「アメリカン・センター図書館総合目録データベース」 のサービス開始について

### 1. はじめに

平成2年7月30日から「アメリカン・センター図書館総合目録データベース」のサービスを開始しました。

### 2. 「アメリカン・センター図書館総合目録データベース」の概要

アメリカン・センター図書館6館（東京、大阪、京都、名古屋、福岡、札幌）で所蔵する資料のうち、図書に関するデータを収録しています。

アメリカン・センター図書館は、現代アメリカについて、あるいは日米両国にとっての関心事について扱った資料を備えている専門図書館で、蔵書資料は主として政治、経済、社会、芸術の分野に重点が置かれ、次のようなテーマをもっています。

- 文 学 ・ 芸 術：文学／美術／建築／音楽／舞台芸術
- 経 済：アメリカ国内経済／国際経済関係／貿易
- 国 際 関 係：アメリカ外交・防衛政策／日米関係
- 現代アメリカ社会：アメリカ政治／社会／文化
- 21世紀の世界：エネルギー／資源／環境／宇宙／食糧／都市問題

なお、データベースでは、資料の所在状況をしめす項目がありますが、検索した資料を最寄りのアメリカン・センター図書館で所蔵していなくても、他の所蔵館から資料を送付してもらうことができます。

### 3. 利用方法

- (1) データベース呼出コマンドは ACCAT です。
- (2) 利用料金は 1回30円 です。
- (3) 検索方法等は LCMARC データベースと共通しますので、「NACSIS - IR 利用者マニュアル JPMARC, LCMARC データベース (JPM, LCMB, LCMS) (平成元年3月) を参照してください。なお、データベースの項目一覧やアメリカン・センター図書館の連絡先等を記載したものを、上記のマニュアルの追録として用意していますので、必要な方は共同利用係までご請求ください。

(データベースの表示例)

```

ACCN : 189001715
YEAR : 1989  CNTY:us  TTL:eng
TITL : Analysis of the U.S.-Japan trade problem : report of the Advisory
      Committee for Trade Policy and Negotiations
PUBL : The Committee, 1989
PHYS : 122 p
VTTL : OH:Report of the Advisory Committee for Trade Policy and Negotiations,
      Feb. 1989
NOTE : 'February 1989.'
NOTE : The name of the Committee was changed to the Advisory Committee for
      Trade Negotiations effective January 1, 1989
NOTE : James D. Robinson, III, Chairman, ACTPN; James R. Houghton, Chairman,
      ACTPN Task Force on Japan
AUTH : *Advisory Committee for Trade Policy and Negotiations
SUBJ : FREE:United States -- Commerce -- Japan//K
LDF : Reproduced by USIS Tokyo
HOLD : 東京・大阪・京都・名古屋・福岡・札幌
  
```

(目録情報課)

## 学術情報ネットワークへのアクセス

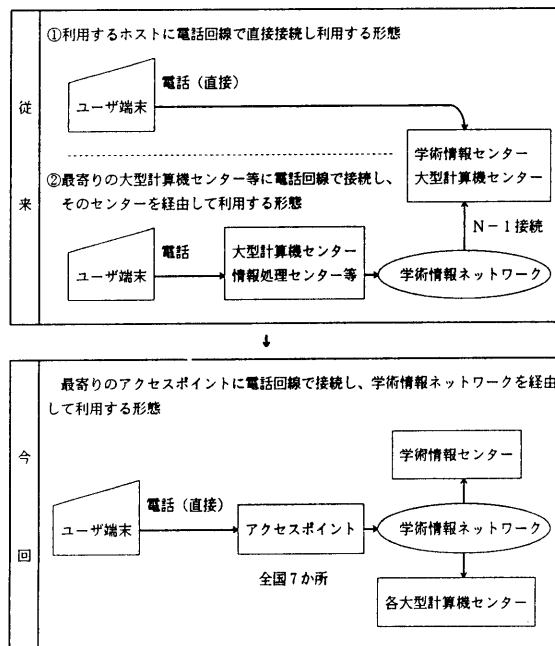
## 電話回線からのアクセスポイントを 身近（全国7か所）に設置 ——平成2年11月1日（木）サービス開始——

学術情報ネットワークは、全国の研究者、図書館等が学術情報センターの各種サービスや、大型計算機センター等のサーバホストを利用するためのインフラストラクチャーである幹線網として機能しているほか、医療情報（国立大学附属病院）、高エネルギー物理学研究、宇宙物理学等の特定研究グループによる情報交換にも利用されています。

このたび、この学術情報ネットワークへの電話回線からのアクセスポイントを全国7か所に設置しましたので紹介いたします。

電話回線を利用する場合の従来利用形態と今回の利用形態の比較を下図に示します。

この新しい接続方式を利用することにより、学術情報ネットワークのアクセスポイントを利用した場合には、①の電話回線で直接接続する場合よりも通話料金が低廉となり、また、②の経由する大型計算機センター等の利用料金は不要となります。



このサービスは、今回が初めてであることから、当分は、利用の動向等を勘案して今後の整備について検討したいと考えています。また、技術動向等を踏まえてさらに多様なアクセス方法を整備していきたいと考えていますので、御要望等をお寄せください。

以下、利用するための準備や接続方法等について説明します。

## I. 利用準備

接続するための利用者側（端末側）のモデムとして、＜表1＞の通信規格のものが利用できます。この場合、端末側の通信パラメータを、＜表2＞のとおり設定してください。

＜表1＞モデムの通信規格

通信速度	通信規格	エラーフリープロトコル
300bps	CCITT V. 21	①なし
1200bps	CCITT V. 22	②MNPクラス5
2400bps	CCITT V. 22bis	③CCITT V. 42
4800bps 9600bps	CCITT V. 32	の選択が可能

＜表2＞端末の通信パラメータ

項目	設定値
データビット	7
ストップビット	1
パリティ	偶数

## II. 接続方法

- ①最寄りのアクセスポイント（＜表3＞アクセスポイント一覧参照）に、端末側から電話をかけます。
- ②電話回線がアクセスポイントに接続されれば、「\*\*NACSIS-NET\*\*」が端末画面に表示されます。
- ③「\*\*NACSIS-NET\*\*」の表示後、利用するサーバホストの加入者番号（＜表4＞利用可能なサーバホスト一覧参照）を入力します。
- ④利用するサーバホストとパケット交換網の接続が完了すると、「COM」が端末画面に表示されます。

（注）

「COM」以外に次の表示をする場合があります。

「CLR NP 67」：これは、加入者番号の間違いですから、番号を確認して再入力してください。⇒③へ

「CLR OCC 0」：これは、相手ホストが話中で接続できない状態です。しばらくして、電話をかけなおしてください。⇒①へ

- ⑤「COM」表示後、サーバホスト用の TSS 接続コマンドを入力してください。  
※サーバホスト用 TSS 接続コマンドは、ホストごとに異なりますので、各ホストの「利用の手引き」等でご確認ください。

&lt;表3&gt;アクセスポイント一覧

地区	設置場所	電話番号	回線数
札幌市	北海道大学	011-746-0608	2回線
仙台市	東北大学	022-268-7706	2回線
東京都	学術情報センター	03-5395-1285	2回線
名古屋市	名古屋大学	052-781-5995	2回線
大阪市	大阪大学	06-878-9864	2回線
東広島市	広島大学	0824-22-9353	2回線
福岡市	九州大学	092-632-5057	2回線

&lt;表4&gt;利用可能サーバホスト一覧

機関名	システム	加入者番号	備考
学術情報センター	情報検索	9 4 1 5 3 0 0	
	電子メール	9 4 1 5 2 0 0	
北海道大学 大型計算機センター	TSS	9 1 1 5 2 0 0	※1
東北大学 大型計算機センター	TSS	9 1 3 6 2 0 0	※1
東京大学 大型計算機センター	TSS	9 3 1 1 6 0 0	※1
名古屋大学 大型計算機センター	TSS	9 5 1 5 0 0 0	※1
京都大学 大型計算機センター	MPS TSS	7 0 1 0 0 0 4	
	UTS TSS	7 0 1 0 0 0 3	
大阪大学 大型計算機センター	TSS	9 6 2 6 5 0 0	
九州大学 大型計算機センター	TSS	9 8 1 5 2 0 0	※1

※1：この5機関については、現在、ホスト側の環境を準備中です。サービス開始日時については、各大型計算機センターにお問い合わせください。

### Ⅲ. 切断方法

サーバホストのセッション切断コマンドを入力することにより、電話回線も含めて自動的に解放されます。

## IV. 接続例

以下の接続例は、①端末側の利用するモデムで、電話回線の接続に AT コマンドが利用でき、②電話回線はダイヤル式で③単独回線（内線式の電話でない）の場合を想定しています。

この条件が異なる場合は、発信コマンドやメッセージが異なります。

(1)北海道地区から学術情報センターの情報検索システムを利用する場合の例

<u>ATDP0117460608</u> .....	電話回線の発信	※1
CONNECT .....	モデム接続のメッセージ	※2
***NACSIS-NET*** .....	アクセスポイント接続のメッセージ	
<u>9415300</u> .....	サーバホストの加入者番号入力	
COM .....	ホスト接続のメッセージ	
<u>(改行のみ入力)</u> .....	ホスト用 T S S 接続コマンド入力	
ENTER TERMINAL TYPE .....	ホストから入力要求メッセージ	
<u>(改行のみ入力)</u>		
ENTER LOGON		
利用者番号入力		
JET12026A ENTER PASSWORD FOR XXXXXX -		
パスワード入力		
>>	} システムの利用	
>>LOGOFF .....		セッション切断コマンド入力
CLR DTE 0 .....	アクセスポイント解放のメッセージ	

※1：普通、通信ソフトの場合は、パラメータで設定します。

※2：ATコマンドの制御で①リザルトコードの表示を有りに設定しており、かつ、②その表示を文字で表示するよう設定してある場合のみ表示します。

(2)九州地区から学術情報センターの電子メールシステムを利用する場合の例

<u>ATDP0926325057</u> .....	電話回線の発信	
CONNECT .....	モデム接続のメッセージ	
***NACSIS-NET*** .....	アクセスポイント接続のメッセージ	
<u>9415200</u> .....	サーバホストの加入者番号入力	
COM .....	ホスト接続のメッセージ	
<u>\$\$\$CON, TSS, JIS83</u> .....	ホスト用 T S S 接続コマンド入力	
NACSIS MHS SYSTEM ON .....	ホストからのメッセージ	
USER ID - <u>利用者番号入力</u> .....	ホストから入力要求メッセージ	
PASSWORD--		
パスワード入力		
KPX # 000472 SNUMB # 9872\$		
SYSTEM ?	} システムの利用	
SYSTEM ?BYE .....		セッション切断コマンド入力
CLR DTE 0 .....	アクセスポイント解放のメッセージ	

(ネットワーク係)

## NACIS-IR システム・データベース収納状況

平成2年9月現在

No.	データベース名称	収納件数	収録期間
1	Life Sciences Collection	849,144	1982年1月～最新版
2	MathSci	721,225	1973年1月～最新版
3	COMPENDEX PLUS	2,111,199	1976年1月～最新版
4	Harvard Business Review	2,439	1927年1月～最新版
5	ISTP&B	1,457,761	1982年1月～最新版
6	EMBASE	1,247,513	1986年4月～最新版
7	SciSearch	2,446,860	1987年4月～最新版
8	Social SciSearch	423,217	1987年4月～最新版
9	A&H Search	382,131	1987年4月～最新版
10	科学研究費補助金研究成果概要データベース	41,372	昭和60年度～最新版
11	学位論文索引データベース	40,627	昭和59年度～最新版
12	学会発表データベース第一系 (電気・情報・制御関連)	31,948	昭和62年度～最新版
13	学会発表データベース第二系(化学関連)	3,597	昭和63年度～最新版
14	学術論文データベース第一系(電子関連) (全文抄録)	156 887	平成元年度～最新版
15	学術論文データベース第二系(化学関連)	3,419	昭和58年1月～最新版
16	現行法令データベース	3,495	平成元年9月末現在(最新版)
17	海外研究プロジェクトデータベース	40,361	最新版
18	JPMARC	963,747	1969年1月～最新版
19	LCMARC (Books)	2,867,487	1968年1月～最新版
20	LCMARC (Serials)	470,566	1973年1月～最新版
21	目録所在情報データベース (和図書)	422,729 2,077,562	昭和61年度～最新版
22	目録所在情報データベース (洋図書)	925,774 1,702,841	昭和61年度～最新版
23	目録所在情報データベース (和雑誌)	53,477 1,095,783	最新版
24	目録所在情報データベース (洋雑誌)	105,053 866,416	最新版
25	アメリカン・センター 総合目録データベース	6,320	最新版
26	データベース・ディレクトリ	905	平成元年9月末現在(最新版)

(注) No. 21～24のデータベースの上段は書誌件数、下段は所蔵件数。(システム業務係)

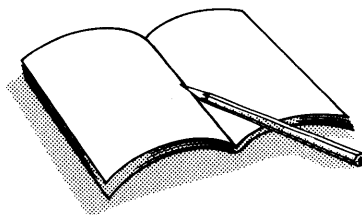


## NACSIS-CAT システム・データベース構築状況

平成2年9月27日現在

データベース名称		収納件数	収録期間	
総合目録データベース	和 図 書	書 誌	421,549	
		所 蔵	2,085,992	
	洋 図 書	書 誌	496,749	
		書 誌 (週及)	430,246	
		所 蔵	1,706,569	
	和 雑 誌	書 誌	57,206	
		所 蔵	1,174,834	
	洋 雑 誌	書 誌	107,180	
		所 蔵	874,208	
	著 者 名 典 拠		399,784	
	統 一 書 名 典 拠		827	
	和 雑 誌 変 遷 マ ッ プ		5,856	
	洋 雑 誌 変 遷 マ ッ プ		12,804	
参照ファイル	LC/MARC	洋 図 書 書 誌	3,429,675	1968年1月～1990年9月
		洋 雑 誌 書 誌	470,566	1973年1月～1990年9月
		洋 書 著 者 名 典 拠	2,215,058	1977年1月～1990年9月
		洋 書 統 一 書 名 典 拠	12,306	1977年1月～1990年9月
	JP/MARK	和 図 書 書 誌	970,451	1969年1月～1990年9月
		和 雑 誌 書 誌	72,174	1968年8月～1990年4月
		和 書 著 者 名 典 拠	26,288	
	UK/MARK	洋 図 書 書 誌	1,137,414	1950年1月～1990年9月
	TRC/MARK	和 図 書 書 誌	212,906	1985年4月～1990年9月
	GPO/MARK	洋 図 書 書 誌	266,660	1976年1月～1990年4月

(システム業務係)



## 平成2年度学術情報センター・シンポジウム の開催について

今年度は、学術情報センター主催で平成2年11月6日から4日間の予定で開催する国際シンポジウム「EXIRPTS」(研究プロジェクト情報の国際交換に関する専門家会議)に、招待講演者として招へいたしたNSF(米国科学財団)のチャールズ N. ブラウンスタイン博士を講演者として迎え、「NACSIS データベース事業の新展開と国際化」をテーマに同一のプログラムで、神戸と東京で開催します。

### 平成2年度学術情報センター・シンポジウム

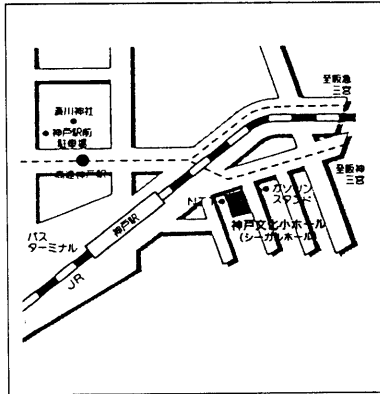
#### テーマ：NACSIS データベース事業の新展開と国際化

- |             |  |      |  |
|-------------|--|------|--|
| 11月13日(火)   | 神戸文化小ホール                                 |      |  |
| 11月15日(木)   | 国立国会図書館講堂                                |      |  |
| 9:00        | 開場                                       |      |  |
| 9:30~10:00  | 「ごあいさつ」                                  |      |  |
|             | 学術情報センター所長                               | 猪瀬博  |  |
| 10:00~10:50 | 「私にとってのデータベース」                           |      |  |
|             | 学術情報センター企画調整官                            | 大野公男 |  |
| 10:50~11:40 | 「EXIRPTS 会議に見る On-going Research 情報への関心」 |      |  |
|             | 学術情報センター研究開発部                            |      |  |
|             | 学術情報研究系研究主幹                              | 井上如  |  |
| 11:40~12:30 | 「EXIRPTS の進展と米国科学技術政策」                   |      |  |
|             | 米国科学財団チャールズ N. ブラウンスタイン博士                |      |  |
| 12:30~14:00 | (昼休み)                                    |      |  |
| 14:00~14:30 | 「NACSIS の当面の事業とその展開」                     |      |  |
|             | 学術情報センター事業部長                             | 雨森弘行 |  |
| 14:30~15:20 | 「NACSIS の EXIRPTS 向けデータベースの形成」           |      |  |
|             | 学術情報センター事業部                              |      |  |
|             | データベース課課長補佐                              | 由良信道 |  |
| 15:20~16:10 | 「NACSIS における目録所在情報サービスの現状と ILL システムの開発」  |      |  |
|             | 学術情報センター事業部                              |      |  |
|             | 目録情報課課長補佐                                | 小西和信 |  |

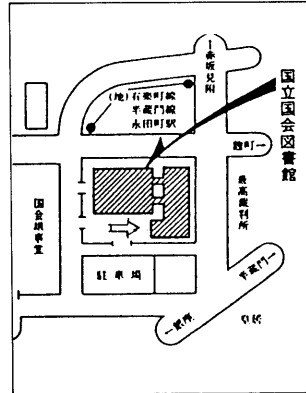
会場地図

①神戸会場 神戸文化小ホール  
住所：神戸市中央区楠町 4-2-2

②東京会場 国立国会図書館講堂  
住所：千代田区永田町 1-10-1



JR 神戸駅  
下車徒歩  
5分



地下鉄  
有楽町線  
永田町駅  
下車徒歩  
2分

\*両会場とも、駐車スペースがありませんので車での来場は御遠慮ください。参加希望の方は、葉書に下記必要事項を記入の上お申し込みください。

記

- ・必要事項 1. 氏名, 2. 勤務先(住所・電話番号), 3. 職名, 4. 参加希望会場名
- ・申込み先 〒112 文京区大塚 3-29-1 学術情報センター管理部共同利用課 研修係
- ・締切 平成 2 年 11 月 2 日(金)
- ・問い合わせ 管理部共同利用課 研修係 ☎03-942-6935(直)

学術情報センター日誌

[平成 2 年 6 月 14 日～平成 2 年 8 月 29 日]

- 6. 14 英国図書館研究開発部長 Brian Perry 氏一行 2 名来訪
- 6. 19 韓国社会科学図書館館長 李鳳順氏来訪
- 6. 26 運営協議員会
- 6. 26～3 年 4. 25 大山助教授, 海外出張(アメリカ)
- 6. 29 評議員会
- 7. 1～7. 8 金助手, 海外出張(韓国)
- 7. 10 総合目録委員会
- 7. 27 国際協力事業団沖繩国際センター外国人研修生一行 15 名来訪
- 8. 3～8. 11 山田研究開発部長, 海外出張(中国)
- 8. 4～8. 11 計助手, 海外出張(中国)
- 8. 29～3 年 10. 12 影浦助手, 海外研修旅行(イギリス)

## 学術情報センター「データベース'90TOKYO」に出展

去る、9月5日（水）から7日（金）までの3日間にわたり、池袋サンシャインシティ・コンベンションセンターにおいて、データベース振興センター・日本データベース協会主催により、内外のデータベースや電子情報サービスの最新システムを一堂に集めた「データベース'90TOKYO」が開催された。学術情報センターもセンターの周知と、センターが作成したデータベースのCD-ROM版、磁気テープ版の紹介と利用の促進を図るため、昨年に引き続き出展を行った。



出展の内容は、プロモーションビデオの放映、学術雑誌総合目録CD-ROM版の検索の実演、NACSIS-IRの検索の実演、パネルの展示、リーフレットの配布などで、とくにCD-ROMの実演にはかなりの関心が集まった。「データベース'90TOKYO」には、5日（水）6,426名、6日（木）9,203名、7日（金）13,865名、合計29,494名が来場し、74社、68

ブースの各ブースとも関心のある来場者で盛況を呈していた。

## 人 事 異 動

発令年月日	氏名	異 動 内 容 ( 転 入 )	現(旧)官 職 等
2. 7. 1	古田 雪乃	管理部共同利用課	神戸大学附属図書館情報管理課

学術情報センターニュース（第13号）

1990年10月1日発行

発行人 猪瀬 博

発 行 学術情報センター 東京都文京区大塚3丁目29番1号（〒112）

電 話 （03）942-6937（直通）情報・資料係